米子水鳥公園

何世紀にもわたり、中海沿いの天然の湿地帯には渡り鳥の水鳥が越冬しにやってきています。第2次世界大戦後には中海沿いで土地造成事業が行われ、大きく広がっていた湿地が徐々に失われたため、地元住民から水鳥の越冬地復元の声が上がりました。
1995年にオープンした米子水鳥公園は、復元に向けての一歩となっています。公園には、100を超える種の1万羽を超える鳥が毎年訪れます。秋から冬にかけてはコハクチョウ、ツクシガモ、ヘラサギ、マガンなどが飛来し、春から夏にかけてはカルガモ、ムシクイ、カイツブリなどがここで繁殖を行います。

利用者に優しい施設
米子水鳥公園は人工湿地で、28ヘクタールの敷地の大部分は葦の茂みに囲まれた深さ1メートルの池になっています。大きな木造のネイチャーセンターがあり、床から天井までのガラス張りの窓からは池を見渡すことができます。望遠鏡は約30台あり、無料で鳥を間近に見ることができます。その他、視聴覚室、教育展示、地域の野生生物や生態についての展示などがあります。また、デジタル顕微鏡を使って羽毛や昆虫などを観察することもできます。小さな図書館もあり、専門のスタッフが質問に答えたり、見所を教えてくれたりします。八角形の展示室には、多くの種類の野雁の剥製標本が展示されています。また、屋外の遊歩道や観覧エリアでは、いくつかの種を間近で観察することができます。また、子どもから大人まで楽しめる体験学習を定期的に実施しており、学校からの課外授業も定期的に受け入れています。

中海水鳥国際交流基金財団は、米子市と鳥取県の助成を受けて、世界各地の専門家や地域社会と積極的に国際交流を行い、長年培ってきた知見や経験を共有しています。また、地域のボランティア運動が盛んで、地域住民が保護区の環境管理に参加することを奨励しています。